

SPARK

特集 Automotive

英・日-環境新時代に 取り組む自動車産業

Telecommunication Technology

家庭の電話と携帯電話が一つに。
英国の「ブルーフォン」、
いよいよ始まる

Euro HQs [エーザイ・ヨーロッパ・リミテッド]

医薬の「メッカ」ここロンドンで、
hhc理念を発信

Environmental Technology

ウェールズレクサムの地から、
明日の「太陽」が結々生まれる

心で? いや、「腹」で感じて 起業家精神を大いに発揮 Andrew Mankiewicz

アンドリュー・マンキエヴィッチ氏と日本との出会いは14年前に遡る。21歳の時、大学内で募集していたJETプログラムに応募し、英語教師として来日した。英国で空手を習っていたことはあるものの、日本に対する予備知識も日本語もからきしだったという。だが数年後には日本で起業し、今や在日英国商工会議所の副会頭も務める。

URL: www.tozaicapital.com

アンドリュー・マンキエヴィッチ氏
東西キャピタル株式会社 代表取締役社長
在日英国商工会議所 (BCCJ) 副会頭であり、在日欧州ビジネス委員会の評議会にも所属している。日本語、イタリア語およびフランス語も堪能。



東西
TOZAI
CAPITAL

起業第一歩のウラには、「東西線」と「吉野家」が

マンキエヴィッチ氏にとって、昨年は飛躍の年だった。バイリンガルITソリューションビジネスを展開している株式会社パナツシユの株式を取得し、氏が代表取締役を務める東西キャピタルの子会社化が実現したのだ。IT関連事業は、氏が現在最も力を入れている分野のひとつであり、「日本のみならず、中国を中心とするアジアにも手を広げていきたい」と意気込む。また、飲食業でも和食チェーンを世界規模で展開させたり、高齢化社会に突き進む日本にヨーロッパのヘルスケア関連企業を進出させるなど、氏の描く青写真は多岐にわたる。

現在35歳。来日当時、日本語は「コンニチワ」や「サヨウナラ」程度だったという。千葉県東金市で英語教師として一年間勤務した後、キャンボン販売のインターンとして営業マンを経験。その後、外資系企業の東京オフィスでコンサルティング業務などを行うも、根っからの「商売好き」が膨らみ、1996年には東西グループを設立した。東京、ロンドン、チューリッヒに拠点を設け、日本への進出を検討しているヨーロッパ企業を相手にしたコンサルティング会社で、なんと「東西線に乗っけて欲しい」という「ネーミングだ」という。「最初は貧乏で、机一つに電話とパソコンだけしかなかった。吉野家はホントよく通った。ケンチンジル・セツト? あれよく食べたなあ」。懐かしそうに語る氏は、今や日本語でのインタビュも可能なほど日本通だ。

投資会社からIT関連、ピザチェーン等々。事業はますます続く

試行錯誤しながらもコンサルタントとして着実に実績を上げていたマンキエヴィッチ氏だが、徐々に「もっと大きなビジネスを」との思いを募らせ、2004年7月には投資会社「東西キャピタル」を設立。同時に、コンサルティングのクライアントだった英国ピザチェーン店の「ピザ・エクスプレス」とジョイントベンチャーを立ち上げ、日本第一号店を原宿にオープンさせた。その後、英国デリ・カフェのベヌーゴを恵比寿と赤坂にオープンした。東と西の企業の持つビジネス文化やポリシーを有効にミックスさせることで、投資企業の価値を向上させるべく事業展開し続けてきた。「日本企業では忠誠心とか人間関係が重んじられるけれど、外資系は利益第一主義。その間をいかに埋めるかがカギです」と語る氏の手腕に、ますます期待がかかる。「成り行きで来日して、今がある」と語るマンキエヴィッチ氏からは、偶然やタイミングを敏感にキャッチして生かす鋭い感性と同時に、柔軟な行動力が見てとれる。いずれも起業家に重要なポイントに違いない。氏が起業にあたり意識しているのは、「gut feel」。直訳だと「胃は腸だが、この場合、「腹の感じ」と表現するのが近い。初対面の際、相手から受ける手がたえのことだという。日本では「心」で感じるものが、英国では「腹」となる。ここにもまた、東西を結ぶ掛け橋的存在の意味を見る。日本では2006年には会社法の改正により、M&A法制も柔軟化されるでしょう。来年が楽しみですね。氏の東奔西走は、今後いっそう加速しそうだ。